

# 木 向 kiri

目白の森から風便り

目白学園 広報誌  
学校法人 目白学園  
目白大学大学院  
目白大学  
目白大学短期大学部  
目白研心中学校・高等学校

通算  
124号

No.26

April | 2013

Special issue 1

作業療法学科の  
「OSCE」を見る  
オスキー

Special issue 2

旅好き学生たちが  
フリーペーパー発行に挑戦

Support Team『next』

学びと発見に満ちたnextの活動

Campus News

輝く目白の星

時を隔てて同じゼミに学ぶ  
親子で共有した学生生活



Special issue 1

## 緊張感あふれる実習前試験

# 作業療法学科の 「OSCE」を見る

オスキー



## 学外から模擬患者と評価者を招き 試験の客観性や公正性を確保

作業療法学科では、各年次で実施される実習のレベルに応じて OSCE を実施しています。中でも、3 年次末から 4 年次にかけての「レベル 3 (総合) 臨床実習 I・II・III」を直前にした OSCE は、学生にとってはいよいよ患者と本格的に接するための総仕上げ。大学として責任を持って学生を現場に送り出すため、指導してきた教員にとっても重要度の高い行事と位置付けられています。

OSCE 実施会場では学生が 6 人 1 組で入室し、同時に 6 つのブースで別々の場面を想定した実技試験に臨みます。1 課題あたりの試験時間は 6 分 30 秒で、1 秒単位で厳密に時間管理をする進行係の学生の声が一定間隔で室内に響き渡ります。1 つの課題が終わると、6人が同時に隣のブースへ移動して次

の課題に挑みますが、その合間に全員が次の指示を待つ数秒間の沈黙が、会場内の張り詰めた空気を際立たせます。

6 つの課題は身体障害と精神障害に関するもので、いずれも詳細に場面設定されています。たとえば、「片麻痺患者に車いす移乗の指導をする」課題では、「目白△△病院の作業療法室で車いすに腰掛けている」模擬患者の状態を「多発性脳梗塞(左片麻痺・発症後 2 カ月)」「座位は安定」「歩行は T 杖近位見守り歩行」「注意障害と軽度の左無視がみられる」というように細かく仮定。学生はそれらの前提をあらかじめ全て頭に入れた上で、各状況に応じた適切な対応ができるかを評価・採点されます。

この評価は、いずれも学外の病院や施設からお招きした現職の作業療法士によって行われます。さらに、作業療法学科では模擬患者も本学の学生や教員ではなく、岩槻キャンパス近隣の自治会や医療系財団法人で模擬患者役の経験が



「急性期の患者に片麻痺上肢機能テストを行う」という課題。取り組む学生の表情は誰もが真剣



車いすへの移乗を患者に指導する課題。介助の力加減にも配慮が必要



緊張のあまり涙を流す学生も……



## 「OSCE」とは?

### 【OSCE】オスキー

「Objective Structured Clinical Examination」の頭文字をとった略語。「客観的臨床能力試験」と訳される。1975年にスコットランドの Harden, W. によって創始された基本的臨床能力の評価方法で、欧米の医療系教育機関で普及し、医師国家試験に導入している国もある。日本では1990年代以降に医療系大学で広まった。

### Student's Voice

## 「OSCE」を体験してみて



保健医療学部  
作業療法学科 4 年  
高島有紗さん

OSCE のときは事前に考えていた通りにいかなかったのですが、かえって、その場に応じた流れや動作を身体で覚えることの大切さを実感しました。学外の方からのアドバイスは新鮮で、自分の課題を実習前に改善するのに役立ちました。臨床実習に出たときも、OSCE のときのあの緊張した雰囲気を経験したおかげで、スーパーバイザーの前でもあまり緊張しませんでした。



て学生たちの実技を見守ります。

実技終了直後に模擬患者の感想と評点、外部評価者の所感を直立不動で聞く学生たちの手の平には汗がにじみ、表情からは自信と不安が複雑に交錯している様子が見てとれます。中には、評価を聞きながら涙を流す学生の姿も……。

目の前で見ていた安井宏専任講師によれば、「失敗したかどうかというより、それだけ緊張する試験だということでしょう。毎年、同じように泣き出してしまう学生が数人いますよ」とのこと。それでも、泣き続ける暇もなくすぐに隣のブースへ移動して、気持ちを切り替えて次の課題に取り組まなくてはなりません。

上級生や卒業生たちが「あれほど緊張した試験は初めてだった」と口を揃える作業療法学科の OSCE。学生たちは全員がこの厳格な実習前試験を経て、目標の作業療法士への階段をまた一歩上っていくのです。

## 「入学当初から、目白大学らしい フリーぺーパーを作つてみたかった」

昨年10月、新宿キャンパスのあちこちにある無料のパンフレットや冊子の設置コーナーに、本学の学生が自ら企画して作り上げたフリーぺーパーが並びました。「旅する目白大生の為のマガジン」とのサブタイトルが付けられたその冊子の名は『machiken』。カンボジアやインドなどの海外見聞録から新宿キャンパス周辺のグルメガイド、さらには旅の本屋の店長への突撃インタビューと、コンテンツも充実したオールカラー16ページの力作です。

発行したのは「まちあるき研究会」、通称「まち研」。その創設メンバーであり、部長として『machiken』作りを発案した天沼真美さん（地域社会学科4年）は、入学当初から「目白大学らしい、おしゃれなフリーぺーパーを作りたい」という夢を持っていたそうです。「まち研の仲間にそんな話をしたら、『一緒にやろうよ！』と背中を押してくれたんです。そこで、『ファッショニ性のある、旅のフリーぺーパー』をコンセプトに11人の制作チームで取り組むことになりました」

とはいって、11人のメンバーは地域

中の失敗談を日記風にまとめたら、他のメンバーから『面白い』と好評を得られて、やっと自信を持って書き上げることができました」

そうして出来上がった文章や写真をどうデザインするかも、大きな問題でした。メンバー全員がデザイン作業は未経験、専用ソフトを買うにもプロに依頼するにも予算が足りない……。その難題を、ネット上で見つけたDTPソフトの無料体験版をダウンロードし、解説書を読みながら、ソフトの無料お試し期間中にすべてのデザイン作業を完了させるという荒業で見事にクリア。印刷の手配時も印刷会社を10社以上リサーチして価格を徹底調査し、限られた誌面に印刷会社のロゴを入れて割引料金にするなどの工夫を重ね、「ファッショニ性のある誌面のクオリティ」として当初から望んでいたオールカラーページを実現したのです。

## 「外に飛び出そう！ の気持ちが原点」

メンバーや全員が試行錯誤を繰り返した制作過程について天沼さんは、「学科や専攻分野、それに学年も異なる学生同士で、興味の対象はもちろん、取

材の仕方や表現スタイルに関する感覚が違うのは当たり前のことで、そんな11人全員の個性を一つの冊子の中で活かし、しかも自分たちだけで作ろうすること自体、当初は本当に大変でした」と振り返ります。

「でも、私たち全員がこの『machiken』を通して読者に伝えたかったのは、実際に足を運んだからこそ得られた体験や素直な感覚。それは、表紙にも書いた、『外に飛び出そう！』という気持ちから生まれたものです。その原点をメンバー全員で共有できていたからこそ、伝えたいことを目に見えるカタチにしたくて完成まで頑張れたのだと思います」

もともとは街を歩き、旅をして、興味あるものを探ったり調べたり、人に会って話したりすることが好きなまち研メンバーたち。彼らにとっては、フリーぺーパーの制作というチャレンジもまた、キャンパスを飛び出して新たな社会に触れ、未知の分野を垣間見てみようという、ちょっと変わった旅心の表れだったのかもしれません。

What?

## 「まち研」とは？

平成23年6月に「まちあるき同好会」として誕生。街を歩き、目白大生の視点でその街の魅力を発掘。写真や文章など、得意分野を活かして役割分担し、ツイッターやブログで情報発信をしている。現在のメンバーは20名。



## Machikenの中身を ちょっとだけ紹介



### 北海道までののんびり列車旅

「青春18きっぷ」を使って札幌まで普通列車で帰省した道中を、折々で食した土地の名物とともに紹介。



### ただのお店紹介、では意味がない

地元・中井のお店案内。単なるグルメガイドではなく、お店の個性が読者に伝わる記事、内容を目指しました。

## Special issue 2

世界が広がるきっかけに――

# 旅好き学生たちが フリーぺーパー発行に挑戦

街歩きや旅を通してその土地の魅力を発掘するサークル、まちあるき研究会。

編集経験ゼロの彼らが一から作り上げたフリーぺーパーには、

果敢な行動力やチャレンジ精神が凝縮されていました。



地域社会学科4年  
梅澤裕次さん

制作の進行管理などを担当。  
国内旅行が大好き。

地域社会学科4年  
天沼真美さん

この企画の仕掛け人にして、  
まち研を創設した初代部長。

心理カウンセリング学科2年  
松井太河さん

ボイスカウトの経験豊富。  
今回は印刷手配などを担当。

## Support Team『next』

留学生と関わり、信頼関係を築く

# 学びと発見に満ちた nextの活動

### ▶ 留学生サポートチーム next

アジアを中心とするさまざまな国からの留学生が学んでいる目白大学。学内の国際交流センターをはじめとして、彼らをサポートするための環境も充実しています。しかし、慣れない異国で暮らす学生たちにとっては、生活面や勉学の上で戸惑うこともあります。

そんな留学生を支援するために平成24年に発足したのが、学生による留学生サポートチーム『next』。現在のメンバーは17名で、空港への出迎えにはじまり、キャンパスや地域周辺の案内、役所での手続きなどのサポートのほか、日本語学習のサポートや留学生との交流イベント企画など多岐にわたる活動を行っています。

チーム結成と同時に第1期リーダーとなったのが、当時3年生だった樺島孝仁さん(地域社会学科 平成25年3月卒業)。それまでにあまり留学生と接する機会がなかったため、活動に参加したいと思ったそうです。



↑ 国際交流センターが日頃の活動拠点になっています

小金井公園でのバー  
ペキュー大会。イベントも盛りだくさん!



next 現リーダー  
石田 茜歩さん

next 前リーダー  
樺島 孝仁さん

「国による考え方の違いにも戸惑うことがありました。それを“壁”とは意識しないようにしました。私は韓国語も中国語もほとんど話せません。でも、初対面の留学生に出会った際は、必ず相手の国の言葉で“ようこそ”と話しかけるようにしました。もしも自分が相手の立場だったらすごくうれしいはず」との想いからです」

発足当初は相談できる先輩や参考となる前例がなかったため、試行錯誤の繰り返しだったとか。「どちらかというと消極的なタイプだった」という樺島さんは、この活動を通して、異文化に触れただけでなく、自分の想いや考えをしっかり持った多くの留学生と接したこと、「自分らしさを大切にしよう」と考えるようになりました。

第2期リーダーの石田茜歩さん(子ども学科3年)は、授業で韓国人留学生と親しくなり、「もっと留学生と交流したい」と考えて、『next』に参加しました。

「私も当初は語学力がまったくなく、入国のサポートもすると聞いて不安でした。実際、区役所に行って書類をそろえることも初めての経験でしたし、携帯電話の契約手続きもよくわかりませんでした。そのため、『next』の活動は私自身にとっての社会勉強になりました」

石田さんはサポート活動だけでなく、留学生と一緒にコミュニケーションを重ね、約1年で日常会話レベルの韓国語を習得しました。印象的だった出来事は、夜中に留学生から「交通事故に遭って救急車で搬送された」と連絡を受けたときだそうで、すぐに病院に駆けつけて医師とやりとりをしたり、警察での事故処理にも付き添ったとのこと。その後、その留学生は回復し、日常生活に戻ることができました。

「緊急事態のときに日本の友人として信頼してもらえたことを大切に受け止めました。今はリーダーとして、留学生の要望はもちろん下級生の意見もしっかりと聞き、より良いサポートができるようにチームをまとめていきたいと思っています」

留学生にとってのメリットに加え、参加する日本人学生にとって多くの発見と学びがある『next』。その活動は、次世代へとしっかりと受け継がれていくそうです。

目白学園のニュースをお届け!

# Campus News

## 中学校・高校

2013.2.22-24

### 「染の小道」に目白研心中学校の全校生徒の作品を展示

3日間にわたり落合・中井の地域イベント「染の小道」が開催された。この地域では染色業が地場産業として発展し、昭和30年代までは目白学園への通学路を流れる妙正寺川でも反物を洗う風景が見られた。

この風景を現代によりみがえらせようとはじまった「染の小道」に目白研心中学校も参加。生徒全員で染めた反物を妙正寺川に展示した。中学校では1年前から伝統工芸である染物について染物作家の先生との交流や染物体験などを通して学び、地域の歴史や文化の一端に触れてきた。また、目白大学社会学部社会学科でも、学園祭で来場者を巻き込んだ「百人染め」を実施するなど、染物を通じて学園全体と地域の結びつきを深めている。



妙正寺川の川面にたなびく反物(上)  
百人染めをクラス全員で制作中(左)

2013.3.02

### 第36回目白研心中学校 英語スピーチコンテスト

佐藤重遠記念館において、目白研心中学校英語スピーチコンテストが実施された。中学1年は「目白研心の一年間」、中学2年は「私の夢」、中学3年は「私の理想」をテーマに、各クラスから選出された計12名の代表者が全校生徒の前でスピーチを発表。各自がテーマに沿った自分の想いや考えをまとめ、「My Ideal Business」や「My First Year at Mejiro Kenshin」と題したスピーチを流暢な英語で表現力豊かに発表した。審査は英語の教師を中心に行われ、各学年の上位3名の入賞者を発表。賞状と副賞が授与され、他の生徒も発表者の英語力に感化された一日となった。



2013.3.02

### 目白研心高等学校 卒業式

第89回目白研心高等学校卒業式が執り行われた。当日は天候にも恵まれ、晴れやかな空の下、保護者や教職員、在校生に祝福されながら187名が卒立っていた。

厳かな雰囲気の中、松下秀房校長からは、「3カ年あるいは6カ年、目白研心で学んだことを胸に留め、力強くたくましく高い志を持ってこれから的人生を歩んでいってください」とエールが送られた。卒業生は高校生活の思い出を噛みしめ、式典終了後には男女とも感極まって泣きながら花道を歩く姿も。たくさんの思い出を共有してきた仲間や先生との時間を名残惜しんでいた。



## 大学・短大・大学院

2012.11.18

### 中国語＆日本語スピーチ大会で学生5名が入賞!

NPO法人日本山西省交流友好協会が主催する、『第3回NETSDAR杯「晋善晋美」中国語＆日本語スピーチ大会』が本学で開催された。この大会は、中国からの留学生と、大学で中国語を学ぶ日本人学生を対象にしたスピーチ大会で、早稲田大学、立教大学など11大学から計23名が参加。「私が知っている、または、知りたい山西省」をテーマにスピーチを行った。



2013.01.26  
アグネス・チャン客員教授による児童教育学科の公開講座を開催

『21世紀に求められる教育実践力を高める』というテーマで児童教育学科の公開講座が行われ、特別プログラムとして、アグネス・チャン客員教授による基調講演を実施した。時には重いテーマを扱いながらも、とてもエネルギー的に、出身地の香港や留学先の北米、またユニセフでの仕事や子育ての経験を通して見てきた世界中の子どもの現状に言及。「これからどんな教育が大切か」という熱いメッセージを参加者に送った。多くの参加者からは「とても勉強になった」という感想が聞かれ、満足度の高い公開講座になった。

2012.11.29～

### 製菓学科 オリジナルレシピ本『Happy Sweets』を配布中

短期大学部製菓学科が初のオリジナルレシピ本『Happy Sweets』を発行した。ブラウニー・ショートブレッドなど手軽に作れるスイーツから、饅頭をはじめ、さつまいもやりんごなどを使った見た目もおいしい本格的な和菓子まで全10品を掲載。いずれも授業で習うレシピなので、学科の学びを垣間見ることができる。



製菓学科の魅力が満載のレシピ本。Vol.2も刊行計画中。

巻末ではパーティの仕事内容などのコラムもあり、製菓業界で働くことを夢見る学生を応援する情報と先生方のお菓子への愛情が詰まった1冊となっている。オープンキャンパスや製菓学科主催の体験実習の来場者、目白大学、短大に関心のある受験生を中心に無料で配布されている。



## 時を隔てて同じゼミに学ぶ 親子で共有した学生生活

日本語教師の仕事を続けながら、  
40代半ばで本大学院に入学した吉本恵子さん。  
その後、息子の夏樹さんも中国語学科に入学し、3年次からは  
母と同じく鎧屋一教授のゼミに所属しました。時を隔てて母と子が  
共有した、目白大学でのそれぞれの学生生活を振り返っていただきました。

大学院国際交流研究科 言語文化交流専攻  
(現・言語文化研究科中国・韓国言語文化専攻) 平成15年9月修了

**吉本 恵子さん(右)**

外国语学部中国語学科 平成25年3月卒業

**吉本 夏樹さん(左)**



### マジシャンの世界に身を置きつつ 母が学んだキャンパスへ

「上海に家族ぐるみで長年付き合っている中国人の親友がいるのですが、夏樹が高校卒業のときに上海に連れて行ったら、その娘さんがとても可愛くなっていたんです。その直後からですね、夏樹が意欲的に中国語の勉強を始めたのは(笑)」

笑いながらそう語る母・恵子さん。夏樹さんは、「その子ともっと中国語でいろんな話がしたいと思ったのは確か」と、照れくさそうに認めた上で、「ただ、当時は高校を出て、自分の進路について真剣に悩んでいました」と振り返ります。

中学生の頃からマジシャンに憧れていた夏樹さんは、高3の時、人気マジシャンのマギー司郎さんに志願して弟子入り。しかし、プロの技の真髄を知る楽しさとともに、マジシャンとして生計を立てるとの厳しさをも実感していました。

「そんな時期の上海旅行で、中国語を身につけることが自分の将来を切り拓くのではないかと感じたのです。中国語を話せる母からも、経済発展を続ける中国の言葉を学ぶことを強く勧められました」

マジックの修業をしながら中国語を学び始めた夏樹さんは、かつて母が大学院生として学んでいた目白大学への進学を考えるようになります。恵子さんは中国の大学で日本語教育に携わった経験があり、日本語教師としてキャリアアップを図るべく、その5年前に本大学院で修士号を取得していました。

「鎧屋一先生の修士論文指導がとても丁寧で熱心だったこと、また、論文作成とは別に、鎧屋ゼミで魯迅の作品を読み込んで中国文化の理解を深められた自分の経験から、目白大学の中国語や中国文化に関する教育には、母親として強い安心感を抱いていました」

### 親子で成長を実感できた 1年間の上海留学

晴れて母の後輩学生となった夏樹さんが「在学中に最も印象に残った経験」と語るのが、2年次に経験した1年間の中国留学。行き先は、あの上海でした。

「中国人だけでなく、世界中からやって来た留学生たちとも中国語で話すことになります。寮のルームメイトはフランス人で、最初は中国語も英語も通じないので大変でした。でも、留学して2ヶ月もすると、街の中で中国人同士の日常会話が聞き取れるようになり、その後は自分の語学力がぐんぐん上がっていくのを実感しました。母の友人の娘さん?もちろん、会いに行きましたよ(笑)」

さらに、言葉でのコミュニケーションをサポートしてくれたのが、マギー門仕込みのマジックの技術です。大学のイベントでマジックを披露したら観客の学生たちから拍手喝采を受け、留学先の大学からも「優秀な文化交流活動」として表彰されました。大学に通いつつも好きなマジックの練習を欠かさない日々の努力が、異国地で大きく役立ちました。

たくましく留学生活を送っていた夏樹

さんと上海で会った恵子さんは、短期間での息子の成長ぶりに驚いたそうです。

「夏樹の中国語の先生は、留学生相手の授業では英語を使って中国語を教えていたのです。そのことが私と先生との会話の中で話題になったとき、私の横にいた夏樹が中国語で『中国語は中国語で教えてほしい。なぜ、学生の能力がバラバラな英語で中国語を教えるのか』とストレートに主張したのです。おとなしい性格の子だと思っていたのですが、中國式にきちんと自己主張できる息子の姿を見て、親として感動しましたね」

### それぞれの形で続く 同じゼミ体験と中国との繋がり

そんな恵子さんも、3年生になった夏樹さんが「まさか、ゼミまで自分と同じ鎧屋ゼミになるとは思わなかった」とか。それまでも、他の家族に内緒の話を中国語でしたりしていた母と子の自宅での共通の話題に、時折“鎧屋先生の授業のレポート対策”が加わるようになりました。

大学院と学部の違いはあっても、親子が時を隔てて同じゼミで学ぶという稀有な体験を本学で共有した吉本さん親子。夏樹さんは帰国後も学内で積極的に中国人留学生と交流するなど中国語の勉強に励み、マジックの修業とも両立させながら、この春無事に卒業。恵子さんも4月から、都内の大学で日本語教育の授業を担当しています。目白大学で培った中国との繋がりは、母と子、それぞれの形でこれからも続いていくようです。